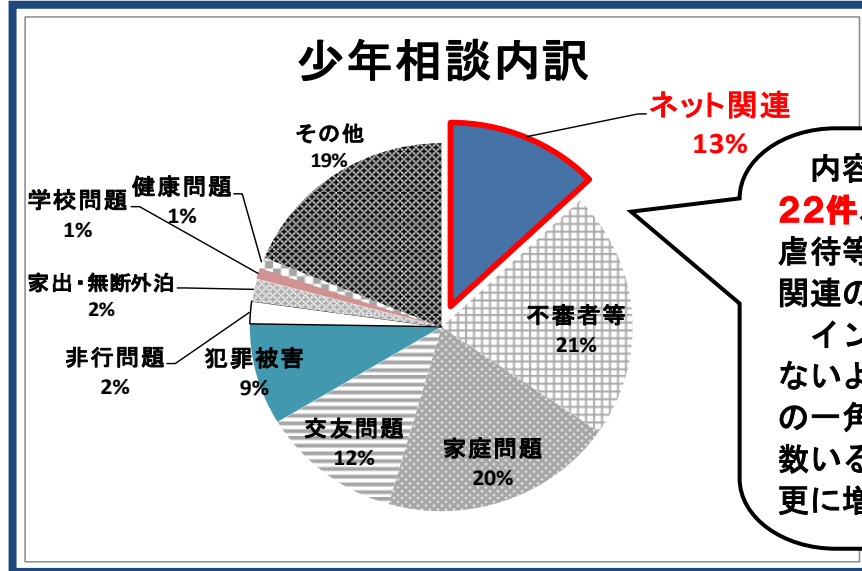


今号のテーマは

「少年が抱える問題」について



平成29年中、敦賀警察署で受理した少年相談は**101件**であり、内訳は下記のグラフのとおりです。



内容は、多いものから不審者等が**22件**、家庭問題（親子喧嘩、児童虐待等）が**20件**、インターネット関連の相談が**13件**でした。
インターネットの相談件数は少ないように見えますが、これは氷山の一角であり、悩んでいる少年は多数いることが予想されます。今後、更に増加することが懸念されます。

◆◇ 敦賀警察署で取り扱った事例 ◇◆

以前から、インターネットの問題について、この「あいうえおだより」でお知らせしてきましたが、注意喚起のために、再度御紹介します。



事例1 自分の画像が勝手にサイトに載せられた

知らないうちに自分の画像を出会い系サイトに載せられていた女子高校生がいました。その画像は自身がSNSにアップしている顔写真でした。自身のSNSは許可した友人しか閲覧できない設定にしてありましたが、このようなトラブルに巻き込まれてしまいました。

気をつけて利用しているつもりでも、十分ではないかもしれません。

事例2 アカウムの売買

SNS上でゲームアプリのアカウントが販売されており、購入しようとした男子中学生がいました。しかし、インターネット上で探してきた他人の身分証の画像を自分のものとして偽って送信したところ、販売者に気づかれてトラブルになりました。



知らない人とのやりとりは大変危険です。



「できること」と「やっていいこと」は違います。
インターネットの利用方法は繰り返し考えさせる必要があります。



◆◇ ネット犯罪 ～全国の事例から～ ◇◆

CASE 1 裸の画像を送信させられた

女子中学生は、コミュニティサイトで知り合った男性モデルになりすました男に、言葉巧みに誘導され自分の裸の画像を送信させられた。



他人に見られて恥ずかしい写真や動画を送ってはいけません。画像を一度送ってしまうと、回収が困難で、取り返しのつかない事になります。

児童ポルノ製造被害

CASE 2 誘拐された

女子中学生は、話を聞いてもらおうと SNS でメッセージを送ったところ、メッセージを返してきた男に「会いたい」などと言葉巧みに誘われて、迎えに来た車で連れまわされた。



SNS で悩みを打ち明ける人の弱みにつけ込もうと、理解者のふりをして接触することを手口とした犯罪被害が発生しています。

未成年者誘拐被害

CASE 3 男子も被害にあっている

男子中学生は、SNS で「女子中学生」と裸の写真を交換したが、この「女子中学生」は大学生の男がなりすましていたものであり、その男に「警察や学校にばらす」などと脅迫されて男の自宅に呼び出され、わいせつな行為をされた。



性被害にあっているのは女子だけではありません。男子も注意が必要です。

準強制わいせつ被害

CASE 4 交際相手に裸の画像を拡散された

女子高校生は、交際相手に求められて送られた裸の画像を、交際相手によって多くの同級生や別の学校の生徒に拡散させられた。



裸の写真や動画が友達に転送され、たちまち拡散されるケースが発生しています。いかなる理由でも、そのような画像を送ってはいけません！

児童ポルノ製造・提供被害

児童ポルノ、児童買春など最悪のケースが全国で発生しています。特に自撮り被害に遭った子供が近年増加しています。

スクールサポーターの独り言 ～便利すぎる社会からの脱却～

ある日のテレビニュースで考えさせられることがありました。「今年は、恵方巻きを昨年実績で作ります。欠品の場合はご容赦を」恵方巻きの大量廃棄が問題となる中、兵庫県のスーパーがこんなチラシ広告を出しました。結果的に客からの苦情はなく、支持する内容の電話やメールが相次いだという。

人口減少の時代、増やし続けるのは限界がある。スーパーが夜遅くまで開いていて、品ぞろえが豊富なのは当たり前という時代は終わりつつあるのでは。これに似た記事として、ファミリーレストランが24時間営業店舗を減らし始めたり、宅配便業者が、再配達の間帯の縮小など業務の抑制を図ることにしたようである。ただ、「便利すぎる社会」から脱却するには、顧客の意識を変えることも重要だ。私も含め、日本の消費者は安価できめ細かなサービスを受けることに慣れすぎてしまった。だが、「便利さ」とは、誰かの必要以上のがんばりや犠牲、我慢の上に成り立っていることに思いを馳せてみよう。商品コスト以上のサービスを受けようとするれば、必ずどこかにしわ寄せを受ける労働者がいることに気が付く。

かつての日本は、正月三が日はほとんどの店が休みであった。深夜や日曜日には小売店は閉じていた。受取時間を指定できる宅配サービスもなかった。どんな仕事にも「程度」や「限度」があるということだ。超高齢社会を迎えて、外出が不自由な人や手助けを必要とする高齢者も増える。こうしたサービスを担う人手を確保するためにも、不要不急のサービスを見直し、「不便さ」を楽しむぐらいの社会としての余裕を持ちたい。